

より良い治療と生活のための

# パーキンソン病 症状確認 BOOK



パーキンソン病にともなう日々の体調の変化や、  
さまざまな症状を簡単に記録してチェックできる

「症状確認BOOK」もご用意しています。

主治医の先生をはじめとするサポートしてくれる方々との  
症状の確認や、情報共有にお役立てください。

医療機関名

沢井製薬株式会社

UD FONT

見やすいユニバーサルデザイン  
フォントを採用しています。

2024年6月作成  
A@HN

より良い治療と生活のための

# パーキンソン病の 診断と治療

監修

川崎医科大学 神経内科学 主任教授

三原 雅史 先生

## はじめに

パーキンソン病は、比較的ゆっくりと病状が進んでいく病気です。

病気が進むにつれて、動作が遅くなったり、手足がふるえたりするパーキンソン病に特徴的な「運動症状」と呼ばれる症状とともに、気分が落ち込んだり不眠になったりする「非運動症状」と呼ばれる症状があらわれることが多くなっていきます。

それぞれの病状に合わせて適切な治療やリハビリテーションを行うことで、病状の悪化を遅らせ、よい状態を長く保てるのが分かってきています。

より良い治療と生活のためには病気について正しく理解し、主治医をはじめとするサポートしてくれる方々と病状を共有し、体調に合わせた治療内容の調整を行っていくことが大切です。



## パーキンソン病の病因と病態

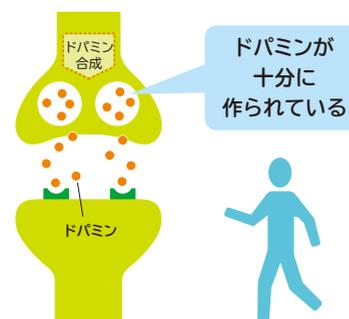
パーキンソン病は、体の動きを調節する脳内の神経伝達の不調によりあらわれます。

体の動きにかかわる脳内のドーパミンという神経伝達物質が不足することで、脳からの指令が体に上手く伝わらず、さまざまな症状が出てきてしまいます。原因として、遺伝による家族性のパーキンソン病もありますが、家族や親戚にパーキンソン病患者さんのいないことがほとんどです。そのため発症には環境要因や遺伝性などの多数の要因が関係すると考えられています。

### ドーパミンの働きとパーキンソン症状出現の背景

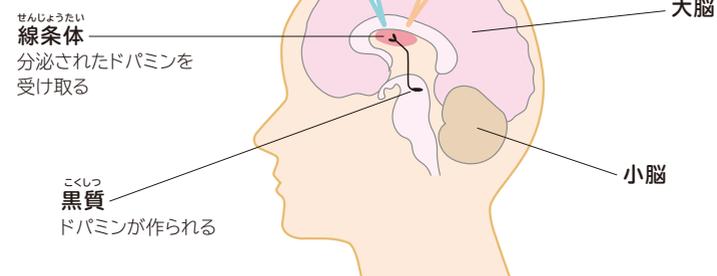
#### 正常時

ドーパミンにより脳における運動の仕組みがうまく調節され運動がスムーズに。



#### パーキンソン病

運動の調節がうまく行われなくなり、体の動きが不自由になる。



# パーキンソン病の症状

パーキンソン病の症状は、病気に特徴的で下のイラストにあるような「**運動症状**」と呼ばれる症状が代表的です。

また、病気の初期や、病気が進むにつれてあらわれるさまざまな「**非運動症状**」にも注意が必要です。

## パーキンソン病の代表的な症状（運動症状）

うんどうかんまん  
**運動緩慢**  
むどう  
・無動

動作が遅くなり、  
少なくなる



せいじじ  
**静止時**  
しんせん  
振戦

手、足、あご  
などのふるえ



きんきょうこう  
**筋強剛**

筋肉のこわばりや  
つっぱりがある



しせいほし  
**姿勢保持**  
しょうがい  
障害

体のバランスが悪く、  
倒れやすくなる



## 非運動症状の例

### ●自律神経症状

立ちくらみ トイレの回数が増える 便秘  
汗がとまらない・汗をほとんどかかない 手足の冷え

### ●精神・睡眠障害

眠れない レム睡眠行動障害\* 日中の眠気 表情の低下 うつ  
やる気が出ない もの忘れ 実際にはないもの・人が見える(幻覚)

### ●その他の症状

疲労・けんたい感 痛み しびれ におい・味がしない  
飲み込みにくい よだれ ものが二重に見える

\*夜中に目が覚め、大声でさけんだり起き上がったりする行動のこと

日本神経学会. パーキンソン病診療ガイドライン2018. 医学書院, 東京; P11-P17.より作成

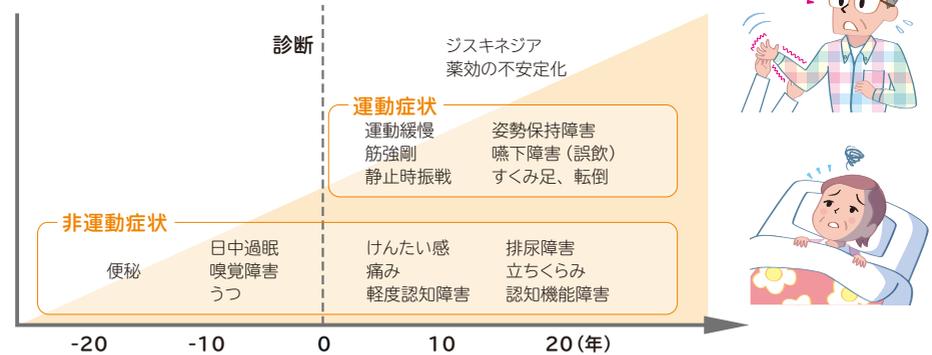
# 病気の進行と症状経過

パーキンソン病では、病気が進むにつれて患者さんに出てくる症状が変わってくるのが知られています。

パーキンソン病と診断を受ける前から、実はパーキンソン病の症状は始まっており、便秘や嗅覚障害などが比較的好くあらわれます。

患者さんごとの症状の違いも大きく、病気の経過に合わせて治療方法を調整し、それぞれに合わせた治療をしっかりと行っていくことが大切です。

## パーキンソン病の経過と主な症状

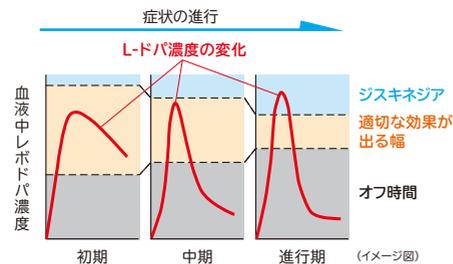


Kalia LV, et al. Lancet. 2015; 386: 896-912. Fig.1を元に作成

## 症状経過と薬物治療のポイント

### お薬\*が効きやすい「ハネムーン期」と「効きづらくなる時期」の出現

\*L-Dパのこと（7ページ参照）



病気の初期にはお薬が効きやすいハネムーン期と呼ばれる時期があり、その後、だんだんとお薬が効きづらくなる時期が来ることが多くなっています。

その後1日の間の症状にも変化がみられるようになり、お薬の効いている「オン時間」と、効果が弱く体が動きにくい「オフ時間」が生じます（ウェアリング・オフ）。これらの時期にあわせて、お薬の量や種類を変えるなどの調整を行います。

### ジスキネジアとは

お薬が効きすぎた時に出やすく、自分の意思とは無関係に口もとや舌、顔、手足などが動いてしまう症状のことです。

## 診断・検査

パーキンソン病の診断のためには、いつからどのような症状が出たのかを確認します。

さらに他の病気やお薬が原因で症状があらわれていないかを確認し、治療薬への反応性などもみながらパーキンソン病と診断する診断・検査の流れがとられています。

必要に応じてパーキンソン病に特徴的な体の変化がないかを確認する脳画像の検査などが行われることもあります。

### パーキンソン病の診断・検査の流れ

#### 問診・診察

- 症状や病歴、家族歴を確認
- 運動緩慢・無動の症状がある



静止時振戦 または 筋強剛 がある

他の病気やお薬による症状ではないことを確認

#### 診察・検査

- 一般的な検査(採血)
- CT、MRI等の脳画像
- MIBG心筋シンチグラフィ\*\*やドパミントランスポーターシンチグラフィ\*\*\*での障害があるかどうか

#### その他所見

ドパミンの働きを補う内服薬による治療に反応性がある など

異常あり

パーキンソン病と診断

※ MIBG心筋シンチグラフィとは  
心臓の交感神経という神経の状態を確認する検査。一般にパーキンソン病患者さんでは、心臓の交感神経が障害されていることが多い。

※※ ドパミントランスポーターシンチグラフィとは  
黒質からその先(線条体)に存在するドパミントランスポーターの密度を画像化する検査。パーキンソン病患者さんでは一般にドパミントランスポーターが減少していることが多い。

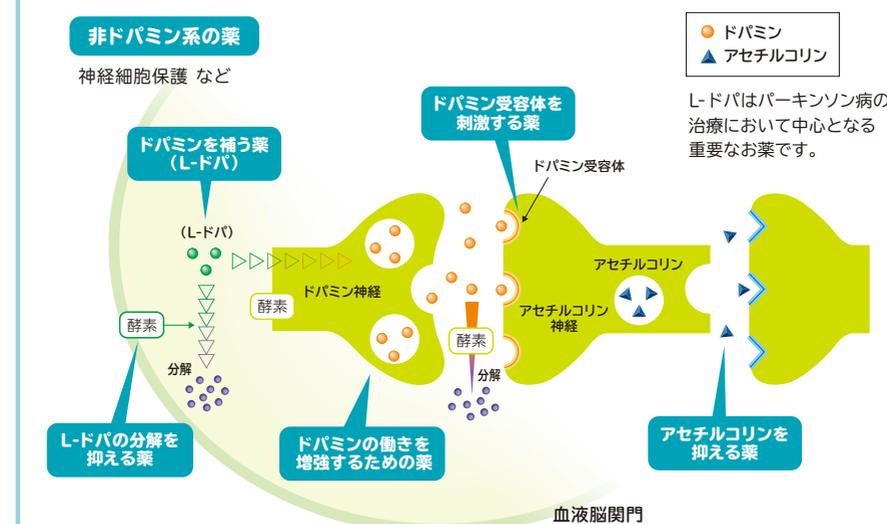
## 治療

治療は内服薬による治療を中心に行われます。

ドパミンを補う薬を中心に、ドパミン吸収を助ける薬、脳の働きをサポートする薬など、症状に合わせてお薬の量や、一緒に服用するお薬を調整しながら治療を行います。お薬による治療をしっかりと続けることで、症状を改善することができるため、自分の判断で中止したりせずきちんと服用することが大切です。パーキンソン病はさまざまな症状があらわれ、お薬の効き方も変わってくる病気であるため(5ページ参照)、主治医とご自身の状態を共有し、伴走しながら治療を進めていきましょう。

また、積極的に日常動作を行ったり、散歩や運動をするなどして身体を動かし、筋力や体力の衰えを防ぐことも大切です。薬物治療とあわせて、体を動かすリハビリテーションが行われます。病気の状態によっては、お薬を体に送り込むための専用ポンプを装着し、安定的にお薬を吸収させる治療や、脳神経系を刺激するデバイスを用いた治療が行われることもあります。

### ドパミンの働きを助けるさまざまなお薬と働き



ドパミンが減少すると、脳内でアセチルコリンという物質の働きが強くなります。その働きを抑えてドパミンとのバランスを保ちます。

(イメージ図)